

ビジネス・コミュニケーション・スキルとしての英語プレゼンテーション法 — 日本人大学生への効果的な指導を目指して —

内野泰子（早稲田大学）

I. はじめに—本論の目的

ビジネス環境のグローバル化や IT 化ならびに企業内での英語の公用語化の進行に伴い、日本人ビジネスマンに求められる英語力も日常的な英会話能力だけではなく、「電子メールで自分の考えや連絡事項を簡潔に表現するための書く能力」、「インターネット内を探索し必要な情報を得るための読む能力」、「適切な資料を使って自分の主張を敷衍・解説するプレゼンテーション能力」といったものに広がって来ている(荻野、2002)。本論では、その中の英語プレゼンテーション能力に焦点を合わせ、日本人ビジネスマンならびに日本人大学生へのアンケート調査の結果や米国の大学の事例ならびに授業実践経験等を踏まえて、日本人大学生が将来ビジネス・コミュニケーション・スキルとして役立てることができるよう英語プレゼンテーション法を指導していくための方策を考察したい。

なお、「プレゼンテーション」というカタカナ語は近年頻繁に使われているが、青木（2003）はこれを「自分の内部にある表現したいことを他人に理解してもらう方法とその実現」と定義している。英語の“presentation”は“oral reporting”、“speech”、“public speaking”等とほぼ同義で用いられる場合もあるが、下記の website 中の記述にもあるように、狭義では、言葉だけではなく visual aid(視覚資料)も利用してデータ等を提示しながら、聴衆に情報を伝達したり、聴衆を説得したりすることを目的とするコミュニケーション活動を指す。本論でも「プレゼンテーション」をそうした狭義のものとして扱うことにする。

“A presentation typically employs visual aids to convey data; a speech relies on words alone to create feeling and imagery in the minds of the listeners.”

(*The Total Communicator*, 2002)

II. 日本人ビジネスマンへの英語プレゼンテーションに関するアンケート調査結果と分析

前述したように、日本人ビジネスマンにとって英語プレゼンテーション能力の重要性が高まってきていることはしばしば指摘されるが、「実際にどのようなビジネス・シーンでそうした能力が求められるのか」、「日本人ビジネスマンはそうした能力の育成のために自らどのように対応しているのか」、また、「英語プレゼンテーションを行なう上で何に苦労しているのか」等の諸点についての調査・分析は未だ十分に行なわれていない。大学生に卒業後役立つような英語プレゼンテーション法を指導して行こうとする場合には、まず上記のような諸点についての実情を現場のビジネスマンから収集・分析することが必要と考え、2003年夏、国際関連業務に携わる18人(年齢20~50代、業種は銀行、保険、商社、メーカー、通信など、うち外資系企業勤務経験者は3名。

海外勤務経験者は 14 名)を対象に下記 4 項目への回答(選択肢、複数回答可)と「プレゼンテーション教育への提言やコメント」の自由記載からなるアンケートを実施し、次のような回答を得た。

(設問 1) 英語プレゼンテーションをどのような場面で必要としたか?あるいは近い将来必要とするとか?

(1)社内向けプレゼンテーション

予算・決算や業績の報告	7
企画・提案などの提示	9
社内研修講師としてのレクチャー	3
その他	1

(その他は「新製品の現地法人従業員向け説明」)

(2)社外向けプレゼンテーション

(a)顧客・取引先・見込み客向け

製品やサービスなどの説明	9
工場や会社の訪問者に対する説明	4
その他	1

(その他は「ファンドへの投資勧奨」)

(b)その他の社外向けプレゼンテーション

国際会議での報告・発表	5
学会での報告・発表	1
一般人向けの報告や発表	1
その他	1

(その他は「新興国からの研修者への日本経済についてのレクチャー」)

(設問 2)これまで英語プレゼンテーションをどのように学んできたのか?

大学・大学院での授業	1
独習-----語学学校	2
-----参考書	4
-----CD/DVD/ビデオ教材	2
-----他の人々の例を見て	7
-----その他(高校の授業、ESS 活動、映画)	3
社内研修	3
特に何もしていない	6

(設問 3)英語プレゼンテーションではどのような点に苦勞しているか？

内容・構成	8
図表などの視覚資料の作成	4
body language	2
質疑応答	8
発音など音声面	3
ユーモアやウイット	10

(設問 4)国際ビジネスに従事することを旨とする大学生は大学で英語プレゼンテーション法を学ぶ必要があると考えるか？

必要不可欠である	5
学んでいれば役に立つ	13
大学で学習しても役に立たない	0

今回のアンケート調査は、回答者 18 名と小規模であったため、統計的有意性には乏しいが、以下の 4 点が全体的傾向として顕著に見られた。

第 1 点は、英語プレゼンテーションが社外との折衝の場だけではなく、社内会議の場でも頻繁に必要とされていることである。設問 1 の選択肢として盛り込んだ社内・社外向けのプレゼンテーション場面は山口(1990)が日本語によるプレゼンテーション場面として列挙したものに若干修正を加え作成したが、外国企業との資本提携、海外での製造拠点、外国人従業員の増大などで、日本語による場合とほぼ同じように社内外の多様な場面で英語プレゼンテーション能力が必要とされるようになって来ている様子が窺える。

第 2 点は、設問 2 に対して「英語プレゼンテーション法について学校教育の場で学んだ」と答えた回答は極めて少数であり、その反面、「他の人々の例を見て学んだ」、「特に何も学習していない」との回答が多数にのぼったことである。これは経験を頼りに自己流で英語プレゼンテーションを行なっている日本人ビジネスマンがかなりの数にのぼることを示唆しているものと思われる。「社内研修で学んだ」と答えた回答者が 3 名いたが、うち 2 名は本人自身が人事・研修担当経験者であるという事情を考慮すると、今回の回答者が勤務する日本企業に関する限り、社内での英語プレゼンテーション研修はそれほど盛んに行なわれていない模様である。AERA English 最新号 (2004 Spring) では「企業語学研修最前線レポート」と題して、NTT データ、三井物産、日産自動車、佐川急便、三菱ふそうトラック・バスの 5 社における英語研修実例が紹介されているが、これらの企業でも英語プレゼンテーションについての研修は希望者の自主的受講という形に留まっている。

第 3 点は、設問 3 の英語プレゼンテーションで苦勞する点として、「内容・構成」、「質疑応答」、「ユーモアやウイット」への回答が集中していることである。米国ではプレゼンテーション教育が盛んに行なわれているが、米国の大学で使用されているビジネス・コミュニケーションの教科書を見てみると、audience に分りやすい論理展開に基づいた「構成法」、導入部分でのユーモアを交えた「つかみ」(hook)、audience に好印象を与える「質疑応答法」などが基本事項として学習対

象となっていることが分る。今回の調査で日本人ビジネスマンが回答で指摘した苦労点は、彼らがそうした系統立った英語プレゼンテーション法の指導を受けておらず自己流で英語プレゼンテーションを行ってきたことと密接に関係しているものと推測される。

第4点は、設問4に対して回答者全員が大学での英語プレゼンテーション教育は「必要不可欠である」あるいは「学んでいれば役に立つ」と答えていることである。回答者のうち数名は自由記載欄に「実際に場数を踏むことが最も重要である」、「実社会ですぐれたプレゼンテーションを聞くことが何より重要」、「授業で年1、2回程度のプレゼンテーションを行なっても役に立たない」とビジネス場面での実践の積み重ねが不可欠であることを強調するコメントを寄せたが、大学での英語プレゼンテーション教育の必要性についてはいずれも肯定的な見解を示している。

以上の調査結果をまとめると、社内外の英語プレゼンテーションのニーズに対応する能力を育成するためには、実践が重要であっても、「構成法」、「質疑応答法」、「視覚資料作成法」などのプレゼンテーション法の基本を大学時代に学習しておけば、実際のビジネス・シーンでもかなりプラスになる可能性があるものと考えられる。

自由記載欄には、大学における英語プレゼンテーション指導方法を考えるうえでの示唆に富んだ次のような提言やコメントが寄せられた。

- 大学の授業でも、実際に企業で行なわれたプレゼンテーションの良い例・悪い例を教材として取り上げ、背景情報と共に学習することができれば非常に役に立つはずである。
- 参考書に出ていた固い表現をプレゼンテーションの場で使って失笑を買ったり、逆に、映画のプレゼンテーション場面で使われていたスラングなどを覚えて使い聞き手の感情を害したりするなど、独習ゆえの失敗があり、独習の限界を痛感した。
- プレゼンテーションの audience の文化的背景への配慮が重要。例えば、グラフやチャートを多用する欧米式の方法が適さない地域もある。
- 外資系金融機関に勤務していた時に、各自のプレゼンテーションをビデオに撮り振り返るという研修を受け、非常に有益であった。
- 日本人が行なう訳であるから、欧米人風の大げさな gesture やわざとらしい joke などは逆効果。英語は拙くとも PowerPoint などをうまく活用し、少ない文章で分りやすい内容とすることが重要。
- 日本人の英語プレゼンテーション能力は一般に世界でも最低のレベルで、英語圏以外の欧州や韓国などの人々にも遅れをとっている。日本の大学でも英語教師自身が PowerPoint を使って英語で授業を展開するなどの方法でまず範を示す必要がある。
- プレゼンテーションを成功させるうえで最重要なのはロジックの構成。
- 日本語で論理立った説明ができる能力がまず重要。そうした能力に立脚し、相手の興味の対象やビジネス文化にうまく合わせて英語でプレゼンテーションを行なっていけばよい。

III. 日本人大学生に対するプレゼンテーションに関するアンケート調査の結果と分析

文部（科学）省は、新学習指導要領（小中学校は1998年告示・2002年実施、高等学校は1999年告示・2003年実施）の中で外国語科・国語科ともにコミュニケーション能力（国語科では「伝

え合う力」と表現されている)の育成を教育目標の重点に置いている。プレゼンテーションに関しても、高等学校指導要領では、英語の「(取り扱うべき)言語使用場面の例」の項に「プレゼンテーション」が含まれたし、国語表現の「内容の取り扱い」の項にも「自分の考えを明確にして、スピーチ、発表、討論などを行なうこと」が盛り込まれた。しかし、同省がこうしたコミュニケーション重視型教育を標榜しているにもかかわらず、保崎(2002)は、「コミュニケーションとしてのプレゼンテーションというものに関して、日本のどの学齢期(大学院も含む)においても系統立った教育に取り組んできていない」と指摘している。新指導要領告示後のコミュニケーション重視型教育の潮流の中で育ってきた現在の大学生は、保崎が指摘したように旧態依然で、前出のビジネスマン回答者達が学生であった時代と同じように「コミュニケーションとしてのプレゼンテーション」教育を全く受けきていないのであろうか。あるいは、コミュニケーション重視の潮流の中で学生が受けてきたプレゼンテーション教育の質や量、学生自身のプレゼンテーションについての認識には何らかの変化が見られるのであろうか。この点に関して大学生の実情を把握するため、下記アンケート(設問1~7は選択肢、設問8は「英語プレゼンテーションを現在自分が欠如していると思う技能や知識」についての自由記載)を2003年9月ならびに2004年4月に大学生合計115名(文科系学生:早稲田大学政経学部2~5年生56名、理科系学生:東京工業大学工学部59名)に対し実施し、次のような結果を得た。

(設問1) 高等学校において英語のプレゼンテーションをしたことがあるか?(ある場合、頻度は?)

ある	12 (うち文科系10、理科系2)
ない	103(うち文科系46、理科系57)

あると答えた学生12名の頻度別内訳

1年に1回	半年に1回	3カ月に1回	1カ月に1回	無回答
5	2	3	1	1

(設問2) 高等学校において英語のプレゼンテーション法を学んだことがあるか?

ある	2(うち文科系2、理科系0)
ない	113(うち文科系54、理科系59)

(設問3)大学において英語のプレゼンテーションをしたことがあるか?(ある場合頻度は?)

ある	11 (うち文科系10、理科系1)
ない	104(うち文科系46、理科系58)

あると答えた学生11名の頻度別内訳

1年に1回	半年に1回	3カ月に1回	1カ月に1回
4	5	3	1

(設問4)大学において英語のプレゼンテーション法を学んだことがあるか?

ある	3(うち文科系2、理科系38)
ない	112(うち文科系54、理科系58)

(設問 5)高等学校・大学において日本語のプレゼンテーション法を学んだことがあるか？

ある	18(うち文科系 8、理科系 10)
ない	97(うち文科系 48、理科系 49)

(設問 6)卒業後、英語のプレゼンテーション能力が必要になると考えるか？

必要	81(うち文科系 27、理科系 54)
必要ない	21(うち文科系 16、理科系 5)
分らない	3(うち文科系 3、理科系 0)

(設問 7)大学で英語プレゼンテーション法を学びたいか？

絶対に学びたい	29(文科系 10、理科系 19)
出来れば学びたい	72(文科系 39、理科系 33)
特に学びたくない	12(文科系 6、理科系 6)
分らない	1(文科系 1、理科系 0)

学生から寄せられた回答の中で、特に興味深かったのは、設問 1 に対して「高等学校において英語でプレゼンテーションをしたことがある」と答えた学生は 12 名いたが、設問 2 に対して「高等学校において英語プレゼンテーション法を学んだことがある」と答えた学生は僅か 2 名、同様に、設問 3 で「大学において英語でプレゼンテーションをしたことがある」と答えた学生が 11 名であるのに対して設問 4 で「大学において英語プレゼンテーション法を学んだことがある」と答えた学生は僅か 3 名であった点である。この数値から推測されるのは、コミュニケーション重視型の英語教育の流れの中で、英語プレゼンテーション活動が徐々に授業の中に組み込まれるようになって来てはいるが、保崎の指摘通り、コミュニケーションとしての英語プレゼンテーション法の指導が系統的に高校・大学の英語授業の中で行なわれているケースは依然として極めて少ないという現状である。

英語同様、日本語プレゼンテーションについても系統立った学習が行なわれていないという問題があることが設問 5 の「高等学校・大学において日本語のプレゼンテーション法を学んだことがあるか」に対する回答から見てとれる。今回のアンケートでは調査対象外とした小中学教育においても、日本語によるプレゼンテーションやスピーチ活動が新学習指導要領で設けられた「総合的学習」の一部に組み込まれるケースが増えて来ているが、プレゼンテーション法や話し方の基本については十分な指導が行なわれていない模様である。堀(2003)はこうした現状を、「小中学校でプレゼンテーションの名のもとで行なわれている発表活動は受け手に何ら働きかけるところのないレベルの低い音読活動にすぎない」と厳しく批判し、下記のような具体的な問題点を指摘している。

- 発表者が口を開けずにしゃべっているので、マイクを通していても言葉が聞き取りにくい。
- 模造紙に書かれた資料の本文をそのまま読んでいただけなので、発表が「書き言葉」になっている。

- 模造紙に書かれた文章の難語句の読み、意味を調べていないので、読み間違いが多い。
- 内容を理解しないままに読んでいるだけなので、聞き手に内容が伝わってこない。
- 聞いている側は、次の自分の発表で頭がいっぱいの様子である。

これらの問題点は小中学生に限らず、大学生の口頭発表でもしばしば見受けられる。小中学校から高等学校まで日本語・英語ともに「受け手に何らかの働きかけを行なう」コミュニケーション活動としてのスピーチやプレゼンテーション法がきちんと指導されていないことの弊害が大学の英語クラスにまで波及しているのが教育現場の現状と言えよう。

また、今回のアンケート調査では、設問 6、7 への回答から「卒業後の英語プレゼンテーションの必要性」の認識に関しては、理科系学生の方が文科系学生を上回っていることが示された。理科系の場合、学会発表を英語で行なう必要性を入学当初から熟知している学生が比較的多いが、文科系の場合、英語プレゼンテーションというと大学の英語クラス内で行なわれる「口頭発表」でしかなく自分の将来とは無関係であるかのような認識を持っている学生も多数見受けられるので、ビジネス・シーンにおけるプレゼンテーションの必要性を具体的に例示して、学習意欲の向上につなげるようにすることが重要であろう。

なお、自由記載形式の設問「英語プレゼンテーションを現在自分が欠如していると思う技能や知識」に対しては、「単語・語彙・表現」(42名)、「発音」(30名)、「英語力全般」(10名)、「スピーキング力」(11名)といった一般的英語力に関する自信のなさを指摘した学生が多く、自信を持ってプレゼンテーションに望むためには、英語力全般の底上げも大切な要因であることが示された。また、「度胸」不足を指摘した学生も17名いた。

IV. 米国の大学におけるプレゼンテーション指導事例

2つのアンケート調査結果から、日本では学校・ビジネス現場のいずれにおいてもプレゼンテーション指導が日英両語ともに十分に行なわれていない現状が浮かび上がってきたが、これとは対照的に、話し方やプレゼンテーション法の指導が一貫性を持って盛んに行なわれている米国の大学の事例を概観し、日本の大学におけるプレゼンテーション指導法を考えて行く上での一助としたい。

保崎(ibid.)はプレゼンテーション指導法として、「何かを見せながら、そのものについて話すという SHOW & TELL といったものは、言語使用の負担を軽くするという点においても、また、目的を持って話すという点からも効果的な練習である。さらに言語使用のレベルが上がれば、BOOK REPORT(他の人のメッセージを理解し紹介する練習)、SPEECH(自分独自の考えを自分の言葉で伝える練習)、DISCUSSION(自分の意見に対して相手の考えを対比させつつ結論に持って行く練習)、DEBATE(自分とは必ずしも一致しない考え方を構築し、相手方と議論するという他者理解を含めた自己表現のゲーム形式の練習)というように徐々に難易度を上げるというやり方も時間があれば可能である」と提言しているが、これはまさに米国の幼稚園から高校に至るまでの学校教育の中で行なわれている「話し方」についての発達段階に合わせた指導法に他ならない。英語を第1言語とする子供達はこのように学校教育の中で何年もかけて人前で話す能力の基盤を徐々

に築いていく機会を与えられている。そして、大部分の米国の大学の 1、2 年次には、パラグラフ構成や論理展開に重点を置いた expository-argumentative essay writing (説明的・議論的な小論文ライティング) の指導が詳しく行なわれると共に、それと連携してスピーチやプレゼンテーションについてもさらに高度なスキルの指導が展開される仕組みとなっている。飯田(2000)が指摘しているように「エッセイとしてのライティングとスピーチとしてのライティングにはいくつかの異なる点がある」が、プレゼンテーション原稿を書くにあたっては構成や論理展開、語彙、語法といった面でも essay writing の力がベースになる。従って、ライティングとプレゼンテーションを補完的・連携的に学んでいく米国大学の方式は極めて合理的と言える。

表 1 は、San Francisco State University において Business Administration(経営学)専攻の英語を第 1 言語とする学生が履修すべきコミュニケーション関連科目の Course Description を一例として示したものである。1 年次には English 114(First Year Written Composition)でセンテンス、パラグラフ・レベルを中心に expository-argumentative writing の基礎、English 150 で formal speaking を含む oral communication の基礎を学ぶ。2 年次には English 214 でさらに発展的に expository- argumentative writing のための論理展開を学ぶか、Business Administration 専攻の学生のために特に設けられた Business 214(Second Year Written Composition: Business)で企業内において必要な written communication について学ぶかを選択できる。なお、2 年次から 3 年次に進級する際には、1、2 年次の writing 学習のまとめとして Junior English Proficiency Essay Test(JEPET)を受け、合格点をとる必要がある。そして、3 年次あるいは 4 年次には Business Administration のコア科目として Business 360(Business Communication)を履修し、それまでに学んだ written ならびに oral communication の基礎の上にさらに実践的なビジネス・コミュニケーションのスキルを養うが、その中ではビジネス・シーンを想定した実践的なプレゼンテーション法の学習にかなりの重点が置かれている。

表 1: San Francisco State University の Business Administration 専攻学生が

履修するコミュニケーション関連科目とテスト

English 114 (3 Units) First Year Written Composition

----Training in expository-argumentative composition, emphasizing work on clear and effective sentences and the organization and development of paragraph and essay.

Speech 150 (3 Units) Fundamentals of Oral Communication

----Introduction to communicate in interpersonal contacts, group interaction, and formal speaking. Skill development in listening, speech preparation, and presentation.

English 214 (3 Units) Second Year Written Composition

----Expository-argumentative composition and critical reading skills through the study of literature: special attention to logic, style, and rhetoric.

Business 214 (3 Units) Second Year Written Composition: Business

[Prerequisite English 114, alternate to English 214]

----Understanding of the communication process in business organizations; training in composition, introducing principles of mechanics of written communication through letters, memos, and essays.

Junior English Proficiency Essay Test (JEPET)

----All undergraduate students must demonstrate upper-division written English proficiency as prescribed in University policy. To meet this requirement, students must take the Junior English Proficiency Essay Test after completing 48 semester units of course work, and before completing 80 semester units.

Business 360 (3 Units) Business Communication

[Prerequisites Speech 150, Business 214, JEPET---all C- or better]

---Written and oral communication including theory, business writing, oral reports, problem-solving, data analysis, use of visual aids in communication, and ethical / legal issues.

次に、米国の大学では、具体的にどのような内容のプレゼンテーション法が指導されているのかを現在 Portland State University 等の Business Communication クラスで実際に使われている教科書 “*Business Communication Essentials*”(2003)の中のプレゼンテーションに関する章(Chapter 12)を例に見て行きたい。同章では、プレゼンテーションを成功させるためのプロセスを3つのステップに分け、それぞれのステップについて下記のような事柄を学習する内容となっている。

Step 1: Planning Your Presentation (立案段階)

---Clarify your purpose. (“inform”、“persuade”、“motivate”、“entertain”等の目的によるプレゼンテーションの中味やスタイルの違いを学ぶ。)

---Analyze your audience (プレゼンテーションを行なう上では audience の興味やニーズ、知

識などを分析することが重要である点とその方法を学ぶ。)

Step 2: Writing Your Presentation (原稿作成段階)

- Organize your presentation. (メイン・アイデアは何であるのかを明確にすると共に、audience との間の友好度などを考慮に入れ audience に対するアプローチの仕方を考えることを学ぶ。また、プレゼンテーション内容のアウトラインを定めるとともに、時間配分や audience の人数、目的、予算などに応じてプレゼンテーションの具体的スタイルを決める方法などについても学ぶ。)
- Compose your message. [Introduction---Body---Close の 3 部構成のプレゼンテーション原稿を作成する方法について学ぶ。Introduction(導入)部分に関しては、audience の関心を自分に向けさせるための最初のつかみ(hook)の部分をどうしたらよいか、続いて presenter としての信頼性を高めるための自己紹介をどのように行なったらよいか、プレゼンテーション内容の概要をどのように示したらよいか等を学ぶ。また、Introduction 部分で頻繁に使われる英語表現も学ぶ。Body(本論)部分については、そこに盛り込まれるいくつかの section がそれぞれ key point から supporting details (evidence)へと続く明確な構成(ライティングにおけるパラグラフと類似)になっているようにすること、また、各 section 間の区切りや論理展開をはっきり示すための方法やそのための transition 表現などを学ぶ。最後の Close(締めくり)部分については、プレゼンテーション内容を確認するための要約や重要点の再強調の仕方やそのための英語表現を学ぶ。]

Step 3: Completing Your Presentation (実行段階)

- Use visual aids. (図やグラフ、OHP や PowerPoint のスライド、フリップ・チャートなど、種々の視覚資料の効果的な作成方法を学ぶ。最近では PowerPoint あるいは同種のプレゼンテーション・ソフトウェアの使用がビジネス・シーンでは標準化してきているので、これらを用いたスライドやアニメーション作りなどについての詳しい指導がなされる場合もある。また、効果的な配布資料の作成法についても学ぶ。)
- Master the art of delivery. (暗記してから行なうプレゼンテーション、原稿を読みながら行なうプレゼンテーション、メモを見ながら行なうプレゼンテーション、即興で行なうプレゼンテーションなど、様々な delivery の形態について学ぶ。視覚資料とプレゼンテーション本体を結び付けるための英語表現や視覚資料の効果的提示方法についても学習する。また、eye-contact、body language、音声のトーン、あがらないでプレゼンテーションを行なうための秘訣なども学ぶ。)
- Handle Questions. (質疑応答では、冷静で前向きな態度で質問に答える方法やプレゼンテーションの終わりを告げる英語表現などを学ぶ。)

この教科書では、プレゼンテーション法についての以上のような学習が終わったなら、今度は実際に政府機関などで行なわれたプレゼンテーションの原稿を Internet 上で検索・分析したり、実際に地域社会で行なわれるプレゼンテーションを聴きに行き評価するといった実践的な課題

が学生に与えられる構成となっている。そして同章の最後には、“What I expect to learn in this class”、“My favorite sports”といった個人的トピックから、“You are speaking to a group of traveling salespersons. Convince them that they should wear their seat belts while driving.”といった社会性のある説得型トピック、“Financial issues in the 1990s”、“The challenges faced by two-income families”等のビジネス関連トピックに至るまで様々な“possible topics”が掲載されており、学生はこれらの中から適当なトピックを選び、すでに学習済みのプレゼンテーション法に従ってプレゼンテーションを行なうことになる。学生各人が自分が行なったプレゼンテーションについてその達成度を自己評価するためのフォーマットも添付されている。

筆者の手元にある英米で発行されたその他の大学生ならびに一般向けのビジネス・コミュニケーション関連の新旧の教科書や指導書[“*Perfect Presentation*”(Leigh & Maynard, 2003)、“*Effective Presentation*”(Comfort, 1997)、“*Technically Speaking*”(D’Arc, 1992)、“*Business Reports: Writing and Oral*”(Ruch & Crawford, 1988)、“*How to Make Meetings Work*”(Doyle & Straus, 1976)、“*Making Successful Presentations*”(Vardaman, 1981)等]に目を通して見ると、英語プレゼンテーション法の重要ポイントは前掲の“*Business Communication Essentials*”で取り上げられている事項（ただし、PowerPoint等の最新技術利用に関する事項は除く）とほぼ一致している。すなわち、同書中の学習事項は英米の大学・一般レベルで長年に渡り教えられてきた標準的・伝統的なプレゼンテーション指導内容と見なすことができるが、質・量ともの充実ぶりに改めて驚かされる。

V. 終わりに---日本の大学における効果的英語プレゼンテーション指導法についての提案

以上、プレゼンテーション指導をめぐる日米事情の違いを見てきたが、次に筆者の授業実践経験や前出のビジネスマンからの提言を踏まえ、将来ビジネス・スキルとして活用できるような英語プレゼンテーション能力の基盤を大学の英語授業の中で育成していくためにはどのような方法をとったらよいかに関して、いくつかの提言を行いたい。

まず、英語プレゼンテーション法と一概に言っても、個々の文化によって差異がある中で、日本の大学では何を標準と見なして指導していったらよいかという問題である。英語プレゼンテーションに関する最近の文献を見ると、英語を第1言語としない audience に対するプレゼンテーションを異文化間コミュニケーションとして捉え、論理展開や視覚資料の提示方法、英語表現、話す速度、body language などの面で従来の英米式のプレゼンテーション法が必ずしも適当ではない場合もあることを指摘するもの（“What to Know When You’re Speaking to an International Audience”, *The Total Communicator*, Spring 2004 等）が目立つ。前掲の“*Business Communication Essentials*”の中にも、例えば、視覚資料作成の項で、“When creating slides for international audiences, remember that color may have a different meaning from culture to culture.”と文化により色に関する認識が違うことも配慮しなくてはならないと記されている。しかし、こうした異文化間のプレゼンテーション法の差異（cross-cultural relevance）への認識が高まる反面、PowerPointなどの米国製プレゼンテーション・ソフトウェアが世界的に普及しプレゼンテーションの標準装備となったことで異文化間のプレゼンテーション法の差異は最近急速に縮小し、英米型が英語でプレゼンテーションを行なう場合の世界標準と成って来ているとも言われる（Pan, S. Scollon, R. Scollon, 2002 /

Khan-Panni, Swallow, 2003)。こうした状況を鑑みると、日本の大学では、全体概要（あるいは結論）が先行し説明がそのあとに続く帰納法を中心とする英米型のプレゼンテーション法をまず標準的なスタイルとして指導したうえで、ビジネスマンが直面するであろうプレゼンテーション上の様々な文化的な差異への配慮についても言及するといった指導法が適切なのではないかと考える。

続いて提言したいのは、米国の大学で実践されているようなライティング指導とプレゼンテーション指導の連携である。前掲の米国の教科書の例を見ても分るようにプレゼンテーションの授業では学習事項が多岐に及ぶ。プレゼンテーション原稿の作成には expository-argumentative writing のパラグラフ構成や論理展開法（定義、分類、比較対照、因果関係、指示法など）ならびにそうしたライティングにおける頻出語句・語法に関する知識がベースとして必須であるが、それらをプレゼンテーションの授業の中で十分説明・実践するだけの時間をとることは難しい。ライティングのクラスで書き言葉としての構成や論理展開をしっかりと学んでいれば、話し言葉としてのプレゼンテーション原稿の作成にもそれらを文章の長さやスタイル、語彙などの面で適当にアレンジしながら応用して行くことができる。Deane & Reynolds(2002)は日本人ビジネスマンの英語プレゼンテーションには下記のような問題点が見られると指摘しているが、その多くは構成や論理展開に関連している。従って、標準的な expository-argumentative essay writing をプレゼンテーションに応用して行くことでこうした問題点はかなりの程度解消できるのではないかと考える。

- Content does not meet audience expectations.
- Weak introduction.
- No emphasis on key points.
- Too much information on visuals.
- Weak conclusion.
- Weak delivery and poor handling of audience questions.

Internet で日本の大学の講義要綱を検索してみると、慶応大学経済学部の Study Skills クラスや明治大学経営学部外国語科目のように英語プレゼンテーションの指導と英語ライティングの指導が連携的な必須科目プログラムとして実施されている事例もごく少数ながら存在していることが分った。しかし、多数の大学では、英語プレゼンテーションと銘打たれたクラスが開講されていても、その内容は個々の教師の随意で、学内でも統一性を欠き、ライティング指導とも特に連携していないものが多かった。また、下記 N 大学のプレゼンテーション・クラスのように、学生に口頭発表を行なわせてはいるが、英米型の標準的なプレゼンテーション法については全く指導が行なわれておらず、狭義での「英語プレゼンテーション・クラス」とは言えない内容のものもかなりの数見受けられた。こうした授業では、順を追った説明を行い最後に結論に持って行く演繹式の構成を中心とする日本型のプレゼンテーション法と結論先行型の帰納式を中心とする英米型のプレゼンテーション法の大きな違いすら取り上げられない可能性もある。

実例---N 大学英語プレゼンテーション・クラス講義要綱記載内容

身近な話題を素材として取り上げ、すでに知っている語彙と表現を使って 日常生活で頻繁に行なわ

れる活動を英語で練習することから始め、数コマの漫画やイラストを作ることなどを行なう。主たる目的はすでに習得している英語を使いこなすこと、自分の興味・関心のある事柄について発表するために必要な語彙と表現力を習得すること。

日本では米国の場合と比べ子供の時からの話し方の訓練の積み上げが欠如していることはすでに指摘した通りだが、次にこの問題についての対処方法を提言したい。実際に大学生のプレゼンテーションを聞いてみると、米国との大きなギャップを埋めるためには幼い頃から人前で話す訓練を段階的に積み重ねていく以外に根本的解決策はないのではないかと痛感する。筆者は東京工業大学において 2003 年度後期科目ならびに 2004 年度前期の英語クラス (Speaking) において英語プレゼンテーション法の指導を行なったが、この 2 つのクラスとも、英米型のプレゼンテーションの基本を学習させるとともに学期内に各学生に 3 回程度のプレゼンテーション実践を課した。その結果、構成、論理展開、transition については学習効果が短期間でもはっきりと見られた反面、delivery については、原稿を読み上げてしまう、落ち着きがない、声が小さく聞こえないなどの問題はなかなか解消されず、delivery の向上には時間がかかることを痛感した。2004 年前期クラス (学生数 21 名) でプレゼンテーション終了後に学生各人に行なわせた自己評価 (選択肢・一部自由記載形式) でも、「eye contact が出来なかった」(8 名)、「あがってしまった」(7 名)、「リハーサルが不十分で文章が頭に入っていなかった」(6 名)、「言いたいことが聴衆に十分伝わらなかった」(5 名)、「言いたいことが聴衆に全く伝わらなかった」(3 名) など delivery 面の反省事項が目立った。この授業では、学生各人が自己評価に加え、他の学生のプレゼンテーションについても posture, voice, gesture, visual aids, organization, transition, content 等の面からチェックしコメントを交換する方法をとったが、これは delivery 面での水準の低さをお互いに気づかせるうえで有益であったと考える。筆者の授業でも今後は各人のプレゼンテーションの様子をビデオ等に記録するなどして、各々の delivery 上の問題点をより明確に気づかせる方法を導入して行かなくてはならないと考えている。

また、同クラスの学生は大学 1 年生としては全般に平均以上の英語力を有していると思われるにもかかわらず、プレゼンテーション後のアンケートでは「今回の英語プレゼンテーションは非常に難しかった」と答えた学生が 21 名中 11 名、「難しかった」と答えた学生が 10 名を数えた。さらに「今回の英語プレゼンテーションで苦労した点」では「英語力全般の不足」をあげた学生が 11 名と過半数に達した。英語プレゼンテーションは、学生が presenter として、また、audience として、英語の 4 技能(speaking, listening, writing, reading)や Canale & Swain が唱える 4 つのコミュニケーション能力(grammatical competence, sociolinguistic competence, discourse competence, strategic competence)を行使することを求められる優れた学習チャンスではあるが、英語が第 1 言語や第 2 言語ではなく外国語であるに過ぎない日本人学生にとっては、言語面での負担が非常に大きいことをアンケート結果から確認した。英語プレゼンテーション指導を成功裏に行なうためには、学生側の全般的英語力を底上げしていかなければならないことも事実だが、プレゼンテーションでは visual aid や body language など言語以外のメッセージで言語メッセージの不足を補うことが可能である点にも学生の注意を向けさせ、言語面での不安感やプレッシャーを少しでも軽減させる方向にもっていくことを提言したい。幸い最近の大学生の多くはパソコン・ソフトによるグラフ

や表の作成を得意とするため、そうした visual aid の作成・使用を奨励すると、英語プレゼンテーションに対する学生の側の興味や自信も高まり、言語学習面にもプラスの効果が生じるものと考えられる。

最後となったが、英語プレゼンテーションの指導にあたる英語教師自身が英語プレゼンテーション法の基本や文化的差異あるいはニーズ等を明確に理解していることが必要不可欠である点をあらためて強調したい。これは自明であるはずだが、現実には、英語教師の場合も、ビジネスマンからのアンケート回答で目立ったのと同様に、英語での学会発表などを自己流で行ってきたケースが多いのではないかと推測する。国の研究・教育機関であるメディア教育開発センター(NIME)では、近年国際学会などで英語プレゼンテーションをする機会が増えてきた大学教師を対象に1998年度から2000年度にかけて faculty development の一環として英語プレゼンテーション講座を16回にわたって開催したが、講座終了後のアンケート(山地、2001)では参加者の大学教師の大多数が「こうした研修は初めて受けたが、是非とも必要であり、自らの学会発表だけではなく学生の指導にも役立っている」と答えている。英語プレゼンテーションの指導にあたる教師は、技術革新に伴うプレゼンテーション・スタイルの変化などについてもビジネス現場に遅れをとらないよう常に知識を更新し、すぐれた presenter として学生の role model となれるよう研鑽を積んでいく必要があることを自戒の念も込めてあらためて強調したい。

(参考文献)

- 青木由直：「情報リテラシーとプレゼンテーション」、コロナ社(2003)
- Bovee, C.L, Thill, J.V and Schatzman, B.E : Business Communication Essentials
Prentice Hall (2003)
- Canale, M and Swain, M : Theoretical bases of communicative approaches to second
language teaching and testing, Applied Linguistics, Vol.1, No.1 (1980)
- Comfort, J : Effective Presentation, Oxford University Press (1997)
- D'Arcy, J : Technically Speaking, amacom (1991)
- Deane, P and Reynolds, K : 「英語プレゼンテーションの基本スキル」、朝日出版社(2002)
- Doyle, M and Straus, D : How to Make Meetings Work, Jove (1976)
- 荻原進介「英語がビジネス公用語になる日」、Works、リクルート(2002年2-3月)
- 保崎則雄：「総合学習としてのプレゼンテーション」、メディア教育開発センター(2001)
- 堀裕嗣・研究集団ことのは：「教室プレゼンテーションの20の技術」、明治図書(2003)
- 伊字佐ゆり：「企業語学研修最前線」、AERA English, 朝日新聞社(2004 Spring)
- 飯田朝子：「英語教育におけるプレゼンテーション指導について---慶応大学経済学部
Study Skill 2000 のケースから」、Colloquial Vol.21 (2002)
- Khan-Panni, P and Swallow, D : Communicating Across Cultures, howtobooks (2003)
- Leigh, A and Maynard, M : Perfect Presentation, Random House (2003)
- Pan, Y , Scollon, S.W and Scollon R : Professional Communication in International
Settings, Blackwell (2002)
- Ruch, W. V and Crawford, M.L : Business Reports---Written and Oral, PWS-Kent Publishing (1988)

Vardaman, G.T. : Making Successful Presentations, amacom (1981)

山地弘起 : 「研修事業『英語プレゼンテーション講座』の試み」、メディア教育開発センター(2001)

山口弘明 : 「プレゼンテーションの進め方」、日本経済新聞社 (1990)

(参考ウェブサイト)

文部科学省 <http://www.mext.go.jp>

San Francisco State University <http://www.sfsu.edu>

The Total Communicator <http://totalcommunicator.com>